

柘榴の實が赤く熟れてゐた。

僕は弟のノートや、書き腐しの水彩畫や、雑誌などのつまつてゐる本箱をまぜかへしたり、昔ムンクやグレコの畫などを集めてゐたのを古ぼけた行李の中から取り出して壁にはりつけたり強羅の繪葉書をピンでトメたりした。

野田と芝が遊びに来た。

僕の弟は息を引きとる前に、首に掛けてゐた世界中の神様の肌守りを、首から外して了つたそうだ。

弟を連れて義母は別府へも行つたのだ。

何んなに苦しんで看病したかと話す。

僕は落ちつけなかつた。

黒い鳥打帽を逆さまに被ぶつて、人口一萬五六千しかないせゝこましい町を歩く事にした。

十二月の二十日過ぎだつたから、南國の南豫でもあたゝかくはなかつた。

菊屋へ寄つた。頼さんが言ふ。